

令和 6 年 6 月 9 日現在

機関番号：32689

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2022～2023

課題番号：22K20226

研究課題名（和文）音声をテーマとする日本語教師教育における現状・課題・解決案

研究課題名（英文）Current Situation, Issues, and Solutions for Japanese Language Teacher Education with Speech Sounds

研究代表者

伊藤 茉莉奈（ITO, Marina）

早稲田大学・国際学院（日本語教育研究科）・助手

研究者番号：50962049

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,500,000 円

研究成果の概要（和文）：研究課題 について、音声テーマとする教師教育は、発音指導をどのように行うかという実用的側面に集中しているという現状を明らかにした。研究課題 について、音声教育に対する日本語教師の省察の観点の不足していることと、多様性を尊重し合う社会の実現に向けて音声観や音声教育理念に関する議論を進めることを課題として提示した。研究課題 について、（1）教師自身が音声教育における教師の役割の捉え方を自覚すること、（2）教師の役割の捉え方のずれに気づき、授業実践の教育理念と音声教育の方針とを統合すること、（3）音声教育における課題を、統合した理念と方針から捉えなおすことを課題の解決案として提案した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

少子高齢化に伴う日本の労働力確保に向けた、2019年の法律の施行を受け、日本語教育を取りまく環境が大きく変わったが、多様な背景と学習目的を持つ日本語学習者数の増大に対し、日本語教育の現場が対応できていないという問題が生じている。本研究では、こうした日本社会全体の問題の解決に向け、日本語教師の教育のあり方を再検討した。中でも、学習者のコミュニケーションに大きく関与する音声テーマとする教師教育に着目し、その現状と課題、課題解決に向けた提案をしたことは、日本語学習者の多様化に対応できる教師の育成に大きく寄与するものであり、研究と現場の分断を乗り越え、社会的に広く波及効果をもたらすことが期待される。

研究成果の概要（英文）：Regarding research topic 1, it was revealed that teacher education focusing on speech is currently concentrating on the practical aspect of pronunciation instruction. As for research topic 2, it was identified as a challenge to promote discussions on speech perceptions and speech education philosophies toward realizing a society that respects diversity, highlighting the lack of reflection among Japanese language teachers on speech education. Concerning research topic 3, proposed solutions to the challenges include: (1) Teachers becoming aware of their own perception of the role of teachers in speech education, (2) Recognizing discrepancies in the perception of the role of teachers and integrating the educational philosophy of classroom practices with the policies of speech education, and (3) Revisiting the challenges in speech education from the perspective of integrated philosophies and policies.

研究分野：日本語教育

キーワード：音声教育 発音指導 日本語教師 教師養成 教師研修 教師教育 教育理念 多様性の尊重

1. 研究開始当初の背景

(1) 研究開始当初の背景として、日本語教育をとりまく環境が大きく変わり、教育そのものの捉え方や教育方法などが、この60年強でめまぐるしい発展を遂げたことが挙げられる。日本語教育は、徐々に個体能力主義的な教育観・学習観から、状況や文脈の中で関係を重視する教育観・学習観へと変化してきたといえる。この変化に伴い、日本語教師教育においても、知識を重視する教師から協働できる教師や社会性のある教師へと、めざすべき教師像の言説が変遷した(藤原ら 2021)。しかし、音声テーマとする教師教育は過渡期にあり、未だに理論的知識の伝授にとどまっていると指摘されている(千 2017)。なぜなら、日本語教育において音声は「言語」の一要素としてのみ捉えられており(文化庁 2000)、理論的知識の伝授で十分指導が可能とみなされているからである。しかし、音声は話しことばのコミュニケーションにおいて、意味と印象に与える影響が大きい(戸田 2009)。つまり、学習者がことばで自己表現し、社会に参加していく際、音声は重要な役割を担っている。学習者を含む誰もが対話を通して社会に参加し、差別や抑圧を受けずに多様性を包摂する社会を構成していくためには、コミュニケーションの観点から音声教育ができる教師を育成することが急務であると考えられた。

(2) 報告者はこれまでの研究から、日本語教育における研究と現場の分断があることを明らかにしている(伊藤・小淵 2019)。これは、研究成果が教育現場および社会に対して十分に還元されていないことを示唆している。研究と現場の分断は、報告者自身が日本語教師として教師教育を受講・企画した経験からも強く感じられた。そして、分断の大きな要因としてパラダイム・シフトを踏まえていない教師教育のあり方を問題視するようになった。加えて、日本語教育研究者として学会発表や研究会に参加した経験を通じ、パラダイム・シフトを踏まえていない教師教育の中で、音声をテーマとする教育が最も従来型の教育を踏襲していると感じられた。報告者は、以上の教師としての経験および研究者としての経験の双方から、音声という切り口で教師教育を新たなパラダイムから捉えなおすことが、日本語教育全体の研究と現場の分断という課題に対するアプローチに繋がると考え、本研究の着想に至った。関連する国内外の研究動向として、多様なことばのあり方を社会に包摂し、母語話者の持つ言語的権威性・優位性に挑戦している点で「World Englishes」(Kachru 1992, Canagarajah 2006 など)が挙げられる。日本語教育においても、多様な背景を持つ学習者の増加に伴い、日本語母語話者の日本語をめざすのではなく、コミュニケーションにおいて自分らしさを表現することばの力が重視されてきた。こうした自己実現の観点から日本語の学びを捉え、音声という観点から日本語教師教育を再構成するということを、本研究の位置づけとした。

2. 研究の目的

(1) 実際に音声をテーマとして実施された教師教育における文献を分析し、具体的な教師教育の現状と課題は何かという学術的「問い」、実践研究を通して、課題解決に向けた提案は何かという学術的「問い」の答えを導くことを本研究の目的とした。

(2) 本研究の目的を達成するため、三つの研究課題を設定した。研究課題「音声をテーマとする教師教育の現状は具体的にどうなっているのか」、研究課題「現状を踏まえた具体的な課題はどのようなものか」、研究課題「具体的な課題を解決するためにどのような提案ができるか」である。

3. 研究の方法

それぞれの研究課題に対する、研究の方法を示す。

(1) 研究課題「音声をテーマとする教師教育の現状は具体的にどうなっているのか」について、実際の教師教育を広く分析するため、出版された文献やインターネット上で公開されている文献(日本語教師に向けた教科書・参考書・報告書等)があるものを教材・資料として集める。集めた文献に対し、二段階の分析を行う。まず、音声観または音声教育観に明示的・非明示的に該当する記述を抽出、読み込んで整理し、伊藤(2021)の三つの区分と照らし合わせつつ、ボトムアップ式に区分を再構成する。次に、分析対象の文献を再読し、トップダウン式に資料を各区分に振り分ける。そこから、現時点での教師教育の音声に対する教育観、そしてその傾向を明らかにする。

(2) 研究課題「現状を踏まえた具体的な課題はどのようなものか」について、研究課題で明らかになった現状重視されている教師教育の教育観を、伊藤(2021)の三つの区分と照らし合わせる。そして、学習者の音声を自己実現の手段として捉える立場に立つ際、現状の教師教育の

教育観がどのように乖離しているか、言説や状況から導き出す。

(3) 研究課題 「具体的な課題を解決するためにどのような提案ができるか」について、研究課題 で明らかになった課題を踏まえ、日本語教師と対話形式のインタビューを実践する。本研究では、日本語教師としての実践を他教師と振り返り、教育理念にまつわる深い対話を通して、次の実践へと繋げていくプロセスを「実践研究」と捉える。教師らの対話をナラティブ分析(野口 2009, やまだ 2021)し、そのプロセスを描くことで、教師教育の課題を解決に導くストーリーを提示する。

4. 研究成果

それぞれの研究課題に対する、研究成果を示す。

(1) 研究課題 「音声をテーマとする教師教育の現状は具体的にどうなっているのか」について、以下の1点を挙げる。

まず、音声をテーマとする教師研修の現状と課題を、実際の日本語教師研修の資料の分析と考察から明らかにした。分析にあたって、三つの観点から各研修を分類した。まず、「音声を単独のテーマとしているかどうか」を見ると、音声を単独のテーマとしている研修が9件、音声を他の学習項目やテーマとともに部分的に扱っている研修が3件あった。音声を単独のテーマとしている研修の場合、音声指導のための教師トレーニング、音声指導のために活用できるコンテンツの紹介、母語別指導法などの内容が見られた。音声を部分的に扱っている研修(3件)の内容には、研修カリキュラムのなかで他の学習項目とともに音声を教える研修が2件、授業環境づくりにおいて、音声を部分的に扱っている研修が1件あった。次に、「誰を研修の対象にしているか」の観点から見ると、現職教師向けの研修が4件、対象を明確にしていない研修(現職教師・実習生向け)が8件であった。対象を明確にしていない、誰にでも開かれている研修が多い点を鑑みると、音声指導に関しては、教育経験の有無に関係なく研修のニーズがあるのではないかと考えられる。最後に、「音声に関して、どのような内容を扱っているか」の観点から研修の課題を分析した。研修の内容として、次の四つが見られた。アクセントやイントネーションなどの「音韻体系」を解説する場合、音声指導に関する「理論」を紹介する場合、実際にどのように音声を教えるかについて「方法」を提示・実践する場合、音声指導のために活用できる「教材」の使い方・選定基準を紹介する場合である。12件の研修の内容は、これら四つの内容が単独で、または混在して構成されており、「方法」が10件の研修で、「音韻体系」が5件の研修で扱われている。以上より、音声をテーマとする教師研修の目的が、実際に音声をどのように教えるか、どんなコンテンツを用い、発音指導をどのようにおこなうかなど、主に実用的な側面に集中していることがわかる。この分析・考察結果は、2022年9月に韓国日本語學會で発表した(伊藤・沈 2022)。そして、この発表における意見交換をふまえ、教師研修に加えて教師養成の資料を分析し、教師研修と教師養成を含む教師教育の現状を把握した。

(2) 研究課題 「現状を踏まえた具体的な課題はどのようなものか」について、以下の2点を研究成果として挙げる。

まず、研究課題 で得た成果をふまえて考察を深め、教師養成の資料の分析を加筆し、音声教育に対する日本語教師の省察という観点が不足しているという課題を浮き彫りにした研究論文を査読付きの学会誌に投稿し、2023年に出版された(伊藤・沈 2023)。そして、日本語教師は音声に対してどのようにアプローチしてきたのかということとその課題を、主要な3種の先行研究から分析・考察した。その結果、音声に対するアプローチの議論は、本質主義にもとづく音声教育というアプローチの範疇で活発化し、多様化していることが明らかになった。多様性を尊重し合う社会の実現に向け、社会構成主義の立場に立って、音声観や音声教育理念を含めて議論を進めることを課題として提示した。この分析・考察結果は査読付きの研究論文として、2023年に掲載された(伊藤 2023a)。

(3) 研究課題 「具体的な課題を解決するためにどのような提案ができるか」について、研究課題 と で得た成果をふまえて考察を深め、日本語教師が他教師との省察をとおして成長するプロセスを示し、省察の意義を示した。この課題に関連する研究成果は、以下の3点を挙げる。

まず、日本語教師の対話のデータから、省察が生まれるプロセスを分析・考察した。異なる音声教育の立場に立つ教師らは、自身の経験と音声教育観のつながりに気づいてその両者を往還しながら語り合い、音声観を構成したことにより、省察が生まれたことを述べた。この分析・考察の結果は査読付きの研究論文として、2022年に掲載された(伊藤 2022)。次に、日本語教師が省察をとおして音声教育の教師の役割を自覚していくプロセスを分析した。日本語教師らの省察のプロセスの分析から、日本語教師が音声をテーマとして、他教師とともに授業実践を振り返る意義として、(1)教師自身が音声教育における教師の役割の捉え方を自覚すること、(2)教師の役割の捉え方のずれに気づき、授業実践の教育理念と音声教育の方針とを統合すること、(3)音声教育における課題を、統合した理念と方針から捉えなおすことを述べた。音声は発話者の印象に強く結びつくため、音声は規範的ではない場合は、日常生活でも言語教育でも発話者個

人の問題であると捉えられる。こうした音声特有の捉え方があるからこそ、音声をテーマとして省察することで、教師が自身の音声に対する規範意識の強さを自覚することができる。そうした規範意識と、学習者の多様性についてどのように捉え、実践していきたいかという教育理念を構成し続けていくことが、日本語教師の省察に求められることを述べた。この分析・考察結果は、査読付きの研究論文として、2023 年に掲載された(伊藤 2023b)。さらに、日本語教師が音声教育の教育観に関する省察を深めるためには、授業実践全体の理念と発音指導の理念の間に乖離があることに気づくことが重要であるということを考察し、学会発表を行った(伊藤 2023c)。

<引用文献>

- 伊藤茉莉奈・小淵見早(2019)「日本語教師が日本語教育研究に乖離を覚える要因とは 日本語学校に勤める日本語教師が研究の当事者意識を持つために」『早稲田大学日本語教育学会』
- 伊藤茉莉奈(2021)「日本語教育における音声に対するアプローチの展望 発音矯正・音声指導・音声学習支援から音声をテーマとする対話の実践へ」『早稲田日本語教育学』第30号, pp.129-148
- 伊藤茉莉奈(2022)「日本語教師の省察はどのようにして起こるか 音声をテーマとする教師間の対話の実践から」『日本語学研究』第74号, pp.121-135
- 伊藤茉莉奈・沈希津(2022)「音声をテーマとする日本語教師教育における課題 現状の日本語教師研修の分析から」『韓国日本語學會第46回 國際學術發表大會 予稿集』pp.137-141
- 伊藤茉莉奈・沈希津(2023)「音声をテーマとする教師養成と研修の課題 教師が成長するための省察という観点の不足」『日本語学研究』第77号, pp.187-204
- 伊藤茉莉奈(2023a)「音声に対するアプローチの分類とその課題」『日本語教育』『早稲田日本語教育学』『音声研究』の分析から」『早稲田日本語教育実践研究』第11号, pp.55-70
- 伊藤茉莉奈(2023b)「他教師とともに音声をテーマとして授業実践を振り返る意義 音声教育における教師の役割の捉え方の自覚」『早稲田日本語教育学』第35号, pp.73-92
- 伊藤茉莉奈(2023c)「授業実践全体の理念と発音指導の理念と乖離 国内の日本語学校で働く日本語教師の語りから」『JSAA-ICNTJ』
- 千仙永(2017)「日本語音声教育の変遷・課題・展望 日本国内における教師教育に着目して」『早稲田大学大学院日本語教育研究科編』『早稲田日本語教育学』第22号, pp.41-60
- 戸田貴子(2009)「日本語教育における学習者音声の研究と音声教育実践」『日本語教育』第142号, pp.47-57
- 野口裕二(2009)『ナラティブ・アプローチ』勁草書房
- 藤原恵美・王晶・加藤真実子・倉数綾子・小林北洋・高木萌・松本弘美(2021)「学会誌『日本語教育』に見る日本語教師養成・研修に関する言説の変遷 政策・施策に照らして」『館岡洋子(編)『日本語教師の専門性を考える』ココ出版, pp.55-73
- 文化庁(2000)「日本語教育のための教員養成について」https://www.bunka.go.jp/tokei_haku-sho_shuppan/tokeichosa/nihongokyoiku_suishin/nihongokyoiku_yosei/pdf/nihongokyoiku_yosei.pdf (2024年6月9日閲覧)
- やまだようこ(2021)『ナラティブ研究 語りの共同生成』新曜社
- Canagarajah, A. S. (2006). The Place of World Englishes in Composition: Pluralization Continued. *College English Composition and Communication*, 57, 586-619.
- Kachru, B. (1992). World Englishes: Approaches, Issues and Resources. *Language Teaching*, 25, 1-14.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 4件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 伊藤茉莉奈	4. 巻 74
2. 論文標題 日本語教師の省察はどのようにして起こるか 音声テーマとする教師間の対話の実践から	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 日本語学研究	6. 最初と最後の頁 121-135
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.14817/jlak.2022.74.121	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 伊藤茉莉奈	4. 巻 11
2. 論文標題 音声に対するアプローチの分類とその課題 『日本語教育』『早稲田日本語教育学』『音声研究』の分析から	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 早稲田日本語教育実践研究	6. 最初と最後の頁 55-70
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 伊藤茉莉奈・沈希津	4. 巻 77
2. 論文標題 音声をテーマとする教師養成と研修の課題 教師が成長するための省察という観点の不足	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 日本語学研究	6. 最初と最後の頁 187-204
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 伊藤茉莉奈	4. 巻 35
2. 論文標題 他教師とともに音声をテーマとして授業実践を振り返る意義 音声教育における教師の役割の捉え方の自覚	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 早稲田日本語教育学	6. 最初と最後の頁 73-92
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 2件）

1. 発表者名 伊藤茉莉奈
2. 発表標題 新たなパラダイムから捉える日本語の音声
3. 学会等名 東京音声研究会（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 伊藤茉莉奈・沈希津
2. 発表標題 音声をテーマとする日本語教師教育における課題 現状の日本語教師研修の分析から
3. 学会等名 韓国日本語學會（国際学会）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 伊藤茉莉奈
2. 発表標題 授業実践全体の理念と発音指導の理念の乖離 国内の日本語学校で働く日本語教師の語りから
3. 学会等名 Japanese Studies Association of Australia（国際学会）
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------